＜学長挨拶＞

首都大学東京における教育

～これまでと今後～

首都大学東京　学長

上野 淳

基礎教育センター長、大学教育センター長などを歴任し、開学当初から本学の教育制度の整備に携わってきた上野学長が、これまでの教育について振り返り、今後の展望を語る。

うえの　じゅん
都市環境学部教授、基礎教育センター長、大学教育センター長、公立大学法人首都大学東京理事等を経て、2015 年より現職。

1. はじめに

私は、本学の前身である東京都立大学の建築学科出身です。学長の任期を全うすることになると、同じ大学に半世紀いることになります。

私は、教育と研究は大学教員の両輪だとずっと思ってきました。分かりやすく魅力的な授業をすると、優秀な学生が研究室に集まってくる。活発な研究活動が、研究室の発信力を高める。一方的に教えるのではなく、学生と教員が互いに教え合い、高め合うことが大学教員の役目であると思っています。

これまでの研究活動を振り返ると、私は 21 年連続で科学研究費を取っておりました。科研費を取ったら学生と一緒に質の高い学術論文をきちんと発信する、そのプロジェクトで学生を博士まで育てて、上野チームの輪を広げていくということを心掛けて、仕事をしてきました。教育と研究に全力投球できるという、本当に幸せな教員人生を送ってきました。

2. 昨今の学生気質

私が大学に入ったとき、大学進学率は 17％でした。今はその約 3 倍になっています。大学全入時代に突入し、入学試験が学生の質を保障することには全くなっていません。

本学の学生相談室における心理カウンセラーの相談件数は増えています。基礎教育センター長になって、コンサルティングや心のケアが非常に大事になっているということを認識しました。また、昨今の学生は自ら進んで学ぶ姿勢がないように感じています。その根源には、大学における学びの場が 100 年以上ずっと変わっていないということがあります。ですから、能動的に学ぶチャンスをつくっていくことが非常に大事なテーマであると思っています。

ある調査によると、学生の 7 割は、半年前の講義を全く思い出せません。従って、教育改革においては、受動的な学びから能動的な学びへの移行が極めて大きいテーマになっているわけです。加えて、勉強時間が圧倒的に足りません。自主的に授業時間外学習をきちんとさせるためにどのような手を打てばよいかも非常に大きなテーマです。それから、本を読みません。メディアの多様化もありますが、高校・大学とむさぼるようにいろいろな本を読んだ自分の学生時代とは比べるべくもありません。ですから、卒論生や修論生を指導すると、しっかりした文章が書けないのです。このことにも非常に衝撃を受けました。

3. これまでの本学の取組

法人化以降、いろいろな矛盾や軋轢はありましたが、この 10 年でかなり乗り越えてきたと思います。

例えば、基礎ゼミナールです。学生にとっても、教員にとっても、非常にやりがいのある授業だと受け入れられています。言語科目では、NSE（Native Speaker of English）を導入した実践英語が 10 年たちました。そろそろ見直す時期に来ているかもしれません。

本学では、教養科目は 120 科目以上提供されています。総合大学ならではの極めて広範な学習機会を提供していると言えますが、卒業要件を 14 単位と設定しているので、少し多過ぎるという気もしています。

現場体験型インターンシップは、始めたときにはかなり苦労しましたが、フィールドに出ていろいろなことを学び、まとめ学習をすることの大切さが分かった

と、参加して戻ってくる学生には極めて評価が高いようです。履修率を向上させることが今後の課題です。

開学時の都市教養プログラムは、ある種、本学の特色だったかもしれませんが、教職員全員が十分納得していたプログラムではありませんでした。そこで、山下英明先生が大学教育センター長になられてから、これを教養科目群と基盤科目群に整理し直し、プログラムとして大変分かりやすくなりました。

このように、いろいろな課題や問題点を、この 10 年の間に教員みんなで相談し、納得を得ながら、一つずつ改良してきました。もちろん開学当初の構想が成功している部分も大変たくさんあることは、言うまでもありません。

私が基礎教育センター長から大学教育センター長に代わるころから、中教審が矢継ぎ早にいろいろな答申を出しました。最もインパクトがあったのは「学士課程教育の構築に向けて」という答申です。アウトカムとして学生にどのような力を身につけさせて卒業させるかを明確にしなさいというもので、極めて当たり前のことですが、大学が確たる自信を持てていない部分もあったわけです。これが長い間、私や山下先生の共通の目標になっていて、ずっと教育改革と言い続けてきたわけです。

大学教育センター長になって、授業評価アンケートを始めました。授業が分かりやすく魅力的に提供されているかどうか、学生の声を聞くことは大変重要なことです。山下先生の時代には、これを授業改善アンケートと改めて、学生の声を授業改善に結びつけるべく、教員が PDCA を回すよう対応してきました。

それから、アクティブ・ラーニングを深めるために、FD セミナーを開催しました。最近では、学生に能動的な学びをさせるにはどんな授業の工夫があるかというヒント集を発行し、先生方に配ったことも、かなりのモチベーション向上に役立ったと思います。

DP（学位授与の方針）、CP（教育課程編成・実施の方針）についても、非常にきちんとしたカリキュラムマップを他の大学に先駆けて作ったことは、本学の特長だと思います。全学で共通項目を定めて、それぞれの授業でどういう学習成果が得られ、能力向上につながるかをきちんと明示したことは、非常に大きな前進だったと思います。

4. 今後の課題

現在、本学の教育改革は第 2 段階に入り、いよいよ本格化してきます。具体的には、学生が本物の考える力を身につけるための教育環境をきちんと整えよう、シラバスをきちんと作ろう、成績評価は厳格にしよう、どういう観点に基づいて成績評価をするのか明らかにしよう、安易に単位はあげません。そういうサイクルがうまく回ることで、大学教育は再び信頼を取り戻し、企業にも大学教育の重要性を十分理解していただくことができると考えています。

それから、TA（ティーチング・アシスタント）や SA（スチューデント・アシスタント）を入れて、授業を補助できる仕組みをつくることにも乗り出しましたし、「首都大版 GP」（首都大学東京教育改革推進事業）と称して、学長が各部局に指定課題を出し、どういう観点に力を入れた教育改革をするかという報告を受ける取組も実施しています。

まだ先は長いと思います。クオーター制、ナンバリング、外国語による授業の拡大などの課題があります。一口に国際化といっても教育の国際化、研究の国際化、キャンパスの国際化がありますが、まずは教育のスタンダードがきちんと国際化されているかが、非常に大きな課題だと考えています。

本学の先生方は大変高い研究力を持っています。それを質の高い教育にうまく循環していけば、学生は先生の活躍する姿、学者として非常に高い見識を持っていろいろなことに挑戦していく姿に、憧れて育つと思います。その意味で、ぜひ高い研究力と水準の高い教育がうまく回っている大学にしていきたいと思っていますので、先生方のご理解とご協力をお願いします。